

Alert 反天皇制運動 43号

[通巻 425 号]
2020 年
1 月 14 日発行

第 4 期・反天皇制運動連絡会

映画『山谷——やられたらやりかえせ』が最初に上映されたのが1985年の12月。それからもう35年が経っているけど、ぼくらがしつこく上映を続けているのは、このドキュメンタリーが写し出している問題がなにひとつ解決していないからだ。

ぼくらは昨年あたりから、〈映画を、聞く〉という新企画を立てている。あらためて映画の内容を見直し、この映画と対話するためである。その第1回目は、日雇労働者の失業保険といってもいい「白手帳」、2回目は「越冬闘争」を選んだ。どちらも下層労働者にとっては「生き抜いていく」ために必要な制度であり、これ以上退くことの出来ない闘いである。そういう意味で、下層の「死を拒否する闘い」として外せない問題がある。映画の後半部、筑豊シーンに繰り込まれている「強制連行」の歴史だ。

このところ「徴用工」をめぐるって国家が出しゃばってうるさい。なぜ個人の補償に国家が手出しをしなくてはならないのか。血債は必ず償還されねばならない。それだけのことでないか。むしろ「徴用」と「徴兵」は一体のもので、「徴兵」が使い捨て兵士を前線に置くように、使い捨て労働者を産業の基幹部分に配置するのが「徴用」の本質だ。国家が責任を負うのはその部分だ。そうしてそれは、なにも「戦時」に限ったことではなくて、ぼくらに言わせれば、寄せ場をはじめとした日雇下層、非正規労働者、外国人労働者たちの存在と続く、現在ただいまの問題である。

というわけで、映画『山谷——やられたらやりかえせ』は、いまも怒りでいっぱい。人を数量で見ようとする社会に徹底的に反抗していく「文化の運動」としても、上映運動は続く。けっしてあきらめない。今年もヨロシク、ね。

(池内文平)

今月の Alert ● 「やあ、戦争だ」「皇位継承問題だ」か？——私たちの言論闘争も開始だ！——*2

反天ジャーナル ● —— 映女、京極紀子、井上森 *3

状況批評 ● ナシヨナリズム煽動の先兵役 —— 皇室祭祀詳説の代替わり報道 ● —— 中嶋啓明 *4

ねっとわーく ● 香港デモ…21世紀の自由と民主主義 —— 陳孤独 *6

太田昌国のみたび夢は夜ひらく(115)

● ゴーン騒動から何を読み取るか —— 太田昌国 *7

マスコミじかけの天皇制(42) ● 「即位・大嘗祭違憲訴訟」高裁(第二次提訴) なんと「差

し戻し」判決を勝ち取る！

——「壊憲天皇制・象徴天皇教国家」批判 その7 —— 天野恵一 *8

野次馬日誌 *9 集会の真相 *10 反天日誌 *12 集会情報 *12



250 円

- 定期購読をお願いします (送料共年間 4000 円)
- 郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://www.ten-no.net/> mail: hanten@ten-no.net
- 以前の情報はこちら ▶ <http://hanten-2.blogspot.jp/>

今月の

Alert

「さあ、戦争だ」「皇位継承問題だ」か？ ——私たちの言論闘争も開始だ！



あつという間の年越しだった。二〇一九年、反天連は、終わりにしよう天皇制！「代替わり」反対ネットワーク（おわてんねつ）の仲間たちと走り続けた。二〇一八年末にバタバタと提訴した即位・大嘗祭違憲訴訟にも、反天連事務局メンバーはそれぞれ原告や訴訟の会の事務局として裁判を共にしてきた。また、同様に反天連も参加するオリンピック災害おことわり連絡会（おことわりリンク）の一年前企画をはさんだ企画も多く忙しかった。そのほか各メンバーがそれぞれに関わる活動も少なくなく、反天連全体が文字通り怒涛の日々であった。例年の12・23集会はなくなり、一二月は少しはゆったりするのかと思っていたがそういうわけにもいかず、12・7集会でわてんねつとはひと段落したものの（「集会の真相」参照）、今年の2・11反「紀元節」行動実の準備や即大訴訟の口頭弁論（「集会の真相」参照）と、年末まで走り続けた。

政府の動きはさらに慌ただしく、「代替わり」行事のすべてが終わったかと思うタイミングで出てきたのは、一二月二七日の「自衛隊の中東派遣閣議決定」の報だ。派兵根拠は防衛省設置法の「調査・研究」というが、米国と、米国が求めている「有志連合」へのエクスキューズの派遣であることは、新聞等でも明確に示唆している。「調査・研究」は防衛相の命令だけで実施可能であり、

お手軽に派兵できる根拠法である。なんともきな臭い年の瀬であった。

そして年明け早々に聞こえてきたのは、一月三日の米軍によるイラン革命防衛隊ソレイマニ司令官殺害だ。ソレイマニ司令官は最高指導者ハメネイ師に近い要人といわれる。そして八日には、イランによる米軍への「報復攻撃」。米軍が駐留するイラクの基地にミサイル攻撃したと報じられた。昨日（一〇日）には「米・イラン全面衝突を回避」の大文字に胸を撫で下ろすが、大きな火種は燃え続けている。問題の解決などいまだないのだ。そのような状況にあっても、安倍は派兵中止を打ち出さない。実質戦地への派兵であり、徳仁天皇制は明仁同様に戦争とともに始まった。

その新天皇の一般参賀は参加者七万弱。決して多い数とは思わないが、それでもそんなにいくのかと、正月早々呆れ果てる。早朝から並んだという家族連れなどインタビュー映像が流されていたが、「平和を祈ってほしい」だの「自然災害のない一年を祈ってほしい」だの、これは初詣のかわりだなと思いつつ、天皇は祈る相手ではなく祈る人として認識されているのだなあ、と妙に納得する。まさに祭祀王であり、参加者たちはみなその信者ということになる。

この天皇の「代替わり」の最終的な儀式として考えられているのが、四月一九日に

予定されている「立皇嗣の礼」だ。天皇の弟・秋篠宮が立皇嗣（皇位継承順位一位であること）を宣言するという儀式で、国の主権で行うが、儀式的の概要については今月中には決めるという。そしてこれが終了したらいいよ「皇位継承者」問題の検討を始めるというのが政府のこれまでの見解だ。「退位特例法」には付帯決議として、「本法施行後速やかに」皇位継承問題の検討に入る」とが書かれているが、安倍はそれを後へ後へと延ばしてきた。しかし、そろそろ始まらないわけにはいかない。

今年の反天皇制運動の大きな柱の一つは、この「皇位継承」問題をめぐる言論による戦いとなることは間違いない。これまでも何度もなされてきた議論である。そして私たちの結論はもちろん「誰がなろうと天皇はいらない」だ。しかし、なぜその結論になるのかを多くの人たちが共有できなければ、結論は空論だ。女性天皇容認が八〇%以上という世論の中で、「女性天皇も女系天皇も女性宮家もいらない」の根拠を、どれくらいの人たちと共有できるのか。反天皇制運動の正念場であるとも思う。今年も張りたい。

まずは2・11反「紀元節」行動と2・23おわてんねつと集会だ（インフォメーション欄、チラシ参照）。たくさんの参加を待っています。今年もよろしく！

（大子）

英ハリー王子、王室離脱？

英エリザベス女王の孫ハリー王子がこのほど、王室からの自立を目指し、年の半分は妻が育ったカナダで暮らす計画をしているとを発表しました。同時に王室の仕事も減らすと。

彼は、メディア嫌いでも知られ、執拗な取材攻勢にメディアを訴えています。何しろ、母ダイアナ妃がパパラッチの取材攻勢の末、事故死という悲劇に見舞われた事件のトラウマがなお残っていると。

妻のメーガンさんは、母親がアフリカ系米人であり、離婚歴もあり、女優であったことから、結婚後も、マスコミの注目を浴びていました。生まれた息子ともども、平穏な生活を送りたい、ということらしい。ところが、今回の発表は、女王などとの事前相談もない、一方的なものでした。

驚いたのは女王と父の皇太子。それでなくとも、英王室は「ごたごた」続き。女王の次男アンドリュー王子がセックススキャンダルに巻き込まれています。少女賄賂パーティを行っていた疑いで逮捕、獄中自殺をした、トランプ大統領のお友達エブスタインと仲良しで、そのパーティにも出ており、当時未成年の少女と性関係を持った、とも告発されています。ア王子は、チャールズ皇太子に諭され、BBCに出演したものの、それが何とも評判が悪い。EU離脱も決まり、英国はいよいよ瓦解？

(映女)

復興五輪の嘘に騙されない

五輪イヤー。私たちにとっては返上まで2000日のカウントダウンが始まった。で、年明けの4日〜5日、福島へ。3月26日から始まる聖火リレーのコースを駆け足で回った。スタートはJビレッジ。原発事故の対応拠点だったが、昨年春全面再開。出発地の9番ピッチは人工芝で輝いていた。昨年一〇月、国際環境NGO・グリーンピースは高濃度の放射線量を周辺で測定、再度の除染が行われたばかりだ。そこから、なでしこジャパンの選手・監督22人が走り出す。未だ不通の常磐線も3・14に再開(富岡―浪江間20・8K)。直前3・4・5に各駅周辺の避難指示を先行解除、復興拠点として再び人が住める街を目指す計画だという。町丸ごと帰還困難区域の双葉町も一部解除、全て「3・26」にあわせたアリバイ作りだ。帰還困難区域を通過する国道6号線の両側は無人の町が続いていた。

地元紙に載った高校生らの座談会には「コロコロが痛んだ。廃炉に向けた技術や雇用を「未来の力」とと真面目に語る彼・彼女らだが、いっしょに回りたいわきの友人は、「最先端の技術はまさに応用可能な軍事技術の実験場」と真逆の解釈だ。高校生らと議論し共有できる思想を持てるかどうか、私たちも試される。

(京極紀子)

政治的なことは個人的なこと？

怒涛の二〇一九年が終わった。数えてみたら、おわてんねっと主催の行動は救援会合わせて一年で一五回位あった。そりゃ大変なわけだ。覚えてるのは4・30や11・14に右翼や警察の前に飛び出るドキドキとか、地裁前で抗議中ふっと横見ると皇居が見えた興奮とか。面はもとより線すら怪しく、点で闘つときが一番生き生きするのであった。でもこのことは書いておきたい。共働きの小学生の子どもがいる身としては、通常運転ですら忙しいテント村に加えての反天は、いささが荷が重かった。家での「任務」はこなしてるつもりでも、頭の片隅ではいつも、原稿の構想やら気の利いたマイクやら。スマホ片手の「winning」戦術を家の中に持ち込んだのもひどくまずかった。都心の会議を終えた夜半の帰り道、背中には「個人的なことは政治的なこと」というあの警句がびったりと貼りつき……。

戯れに「政治的なことは個人的なこと」とひっくり返して呟いてみてもひとり。

いや、こと反天に関してはそれはあながちミスリードではないかも。とか、なんとか。多摩川のほとりでしばし立て直して、またうってです！

(井上森 立川テント村)

反

天



ジャーナル

状況批評

思想・状況・批評

ナシヨナリズム煽動の先兵役

中嶋啓明（人権と報道・連絡会）

皇室祭祀詳説の代替わり報道

秋篠宮の「立皇嗣の礼」とやらが四月に残されているが、昨年一年をかけて大騒ぎした一連の代替わり儀式が、ひとまず終わった。年が明け、国際社会で新天皇にスポットを当てる次のお披露目の場として、メディアは総力を挙げて東京五輪の宣伝に躍りになっている。イランに対するアメリカの戦争脅迫に追隨し、自衛隊の中東派遣でトランプにシッポを振る安倍政権下の日本社会は、睨抜けた「平和ボケ」顔をさらしながらメディアの煽動に乗って踊っている。

後退した「表現の自由」と批判意識

『日本経済新聞』は二月二六日、大嘗祭の終了を受けた社説でこう述べている。
「夜から未明にかけ、一般の目に触れない密室での儀式に、多額の国費が費やされることには各層にさまざまな意見がある。／政府が『公的性格』を強調するのであれば、儀式の内容やその意義、予算の使い道などについて、わかりやすく情報を公開すべきではないだろうか。」

一連の代替わり儀式では、いつも以上にオベンチャラ報道が乱舞した。それには右も左も、保守反動もリベラルも違いはない。

三〇年前の「平成」への代替わり時も同様だった。

だが、昔の新聞記事を少し見返してみても、当時は今回ほど、元号や儀式を事細かに報じてはいなかったように思う。

メディアは今回、大嘗祭の歴史を詳しく振り返り（大嘗祭 ひもとげば／昭和の際に『秘儀説も・飛鳥時代、中国文化に對抗し誕生？』（『朝日』一月八日朝刊）など）、カラーをふんだんに使ったイメージ図「古来の秘事 厳かに／国民の安寧祈る」（『毎日』一月一三日朝刊）で式の次第を詳細に解説した。

あるいは「元号総覧」と掲げ、「大化」以来のすべての元号を紙面一面使ってスラズラと並べた（『東京』四月二日朝刊）。

私が所属する「人権と報道・連絡会」は二月二八日、「表現の自由とマスメディア」をテーマにシンポジウムを開いた。シンポでは、名古屋で昨年、開かれた「表現の不

自由展・その後」で実行委員会メンバーを務めた小倉利丸さんが、一時開催中止を強いられた同展の経緯を報告。小倉さんは、「平和の少女像」と共に右翼勢力の攻撃対象の中心になった大浦信行氏の作品「遠近を抱えて」について、富山で以前、問題になった一九八六年当時には、作品の写真が新聞紙面に掲載されたにもかかわらず、今回は、作品がほとんどメディアで報道されなかった点を指摘、「表現の自由」の後退に懸念を示していた。

「秋の収穫を祝う素朴な農民文化が源流とされる『秘事』が粛々と続いた」（『闇の中 秘事粛々』（『毎日』一月二五日朝刊）と報じる雑観を読んでも、「幄舎では儀式の流れがほとんどつかめないため、トイレに立つ人が増えた。午後八時を回ると、『陛下はどこにいるんですか』などと私語を始める人、タバコを吸いに外に出る人、さらには大あくびをしたり、こっくり、こっくりと居眠りをする人も」と伝えていた九〇年一月二三日の同紙と比べ、批判意識が低下しているように感じてならない。

今回のメディアの代替わり報道で、天皇制の「存在意義」があらためて民衆の脳髓に深く刷り込まれたことは間違いない。

「儀式の内容やその意義、予算の使い道など」について情報公開を要求するメディアの報道は「そつした取り組みを通じ、国民と皇室の絆が強まり、両者の距離が縮まることを祈」（前掲『日経』社説）つてのことにはすぎない。

我田引水の憲法解釈

月刊誌『世界』の二月号で、京都大学人科学研究所教授の高木博志が「近代天皇制」と「史実と神話」と題して書いている。

高木は、百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録で、代表する古墳の呼称を「大山古墳」との併記でなく、「仁徳天皇陵」に一本化したことなど、「史実と神話」の曖昧化が、様々な局面で起きていると指摘。「天照大神以来の『万世一系』の天皇制の『血統』を視覚化し、国民に軟らかく確認させる大嘗祭・『親饗の儀』などの代替わり儀式もそうである」として、「史実と神話」の曖昧化は、普遍性のない内向きのナシヨナリ

ズムをもたらす」と警告を発している。

皇室祭祀の「希少性」を言い募って日本の特殊さを自賛し、日本民衆のナショナリズムを大々的に煽動する。一連の代替わり儀式の意義と目的が、そうしたところにあったのは間違いない。メディアはその先兵としての役割を忠実に果たした。

そんな中、一〇月二日の『産経』に載ったある論説が目を引いた。

「共産党は憲法を守れ」。論説副委員長の榊原智による「一筆多論」だ。いつから『産経』は護憲派になったのかと驚きながら、一応目を通してみた。「国民主権」原則に基づき代替わり儀式を批判する共産党を揶揄したものだ。いわく――、

「天皇が憲法第一章に置かれているのは、天皇が日本の国の始まりから一貫して国の首座にいらした日本の歴史、国柄に基づく。／憲法第一条で天皇の地位が「国民の総意に基づく」とあるのは、それゆえだ。たまたま今、生きている国民の多数決に基づくものではなく、過去、現在、未来の国民の総意の規定だととらえるべきだ。（略）立憲君主である天皇が、憲法に同居する国民と矛盾されるわけもない。臣下の筆頭である内閣総理大臣が即位される天皇陛下に対して、万歳を三唱するのは自然なことだ。／憲法の英訳は「constitution」だが、これは国柄、国体とも訳される。共産党は、憲法は国柄を踏まえて解釈すべきだという常識を身につけ、現憲法を守ってもらいたい」。

右翼側にも、なかなか「アタマのいい」人がいるものだ。「一般意思」とやらの彼らなりの解釈が。憲法や法律も我田引水。右翼側も「理論武装」に必死なのだ。こうした都合主義解釈が、右翼内だけにとどまらず、そのうち一般メディアにも滲出てくるのではと危惧する。

『万世一系』もスキャンダルも

ネット上では昨年、愛子が天皇になり、女優の芦田愛菜が首相になる三〇年後の未来を描いた小説が話題になったらしい。

『毎日新聞』の一月四日朝刊で、編集委員兼論説委員の伊藤智永が紹介している。伊藤は「日本初の女性首相は案外、女性天皇誕生を待ってようやく実現するのかもしれない」とまで言う。なんともはやだ。

メディアは今あらためて、女性天皇論議の再燃に火をつけようと躍起だ。

近現代の天皇制は当初から、イギリスをはじめヨーロッパの王室をモデルにしていた。グローバル化の進展に伴い、明仁、美智子天皇制下で、そうした動きはさらに加速した。そのヨーロッパでは各国王室が次々に、王位の女性継承原則を導入していった。メディアでさまざまに言われるように、明仁、美智子をはじめ、徳仁、雅子らも、

女性天皇や女系天皇の容認を視野に入れているのかもしれない。

一方で、日本の天皇制が、自らを神の末裔と妄想する万世一系のフィクションを捨て去ることができないのも事実だ。万世一系神話から切り離されては、自らの「権威」の正統性を担保することができなくなるのだ。だから、万世一系神話を支えてくれる神道主義右翼勢力を見捨てるわけにいかない。

明仁、美智子らが、グローバルゼーションに対応して、リベラル、左翼に支持基盤のウイングを広げることができたのも、安倍晋三首相がしっかりと、神道主義右翼への目配りを欠かさなかったからだ。明仁、美智子天皇制と安倍政権との関係は持ちつ持たれつ。単なる役割分担にすぎない。

徳仁、雅子が天皇位、皇后位につくと、手のひらを反すように徳仁、雅子へのヨイショ記事が横行し、それと引き換えに、秋篠宮「家」に対する非難、誹謗、揶揄や、明仁、美智子への批判が噴出してきている。秋篠宮「家」の長女眞子の結婚を巡るスキャンダルに見られるように。

天皇、皇后へのあからさまな批判はできない。特に「今上」天皇に対しては。だが、それ以外の皇族が、批判、場合によっては誹謗され、貶められることは、ヨーロッパ王室を模範にする天皇制にとっては必要悪なのだ。ネット社会では、そうした動きを止めることはできない。それどころか、スキャンダルにさらされることは、天皇制の「寛容さ」を誇示するいい材料になる。

半面、大嘗祭の簡素化を謳う秋篠宮が「大嘗祭自体は絶対にすべきもの」とくぎを刺したように、天皇、皇族は皇室祭祀を無視するわけには絶対にいかない。神の末裔としてのアイデンティティを、神道主義右翼はもちろん民衆に、目に見える形で示すためだ。

神社本庁の足下ゆらぐ？

業界誌「選択」の一月号に、神道政治連盟（神政連）の影響力が低下していると指摘する記事が載っている。バリバリの極右安倍が首相を務める政権下で「なぜこのような事態になったのか」と疑問を呈しているのだ。

後継者不足や氏子の減少による経済的困窮、神社本庁の支配に抵抗して各地の傘下神社から上がる不満、反発の動き等々、神道主義右翼勢力は今、その足下に見過ごすことのできない揺らぎを抱えているようだ。

その一方で、明治神宮や伊勢神宮など大手神社が、パワースポット・ブームに便乗し、かつてない参拝客の増加で隆盛を誇っているのも事実だ。

天皇制再編の行方を占ううえで、注目したい。

なんざー NETWORK

香港デモ…21世紀の自由と民主主義

二月一九日、新宿アルタ前から「香港に自由を！連帯行動」のデモが出発。一〇月に続いて二度目の香港連帯デモだ。参加者は一回目よりは少なく五〇人程度だったが、コースは新宿通りと靖国通りの一周なので大変目立つ。黄色いヘルメット姿の勇武派スタイルも定着した。六月から続く民主化デモへの連帯だ。応援してくれる歩行者もチラホラいる。デモは香港の民主化だけでなく、中国の民主化、沖縄の自決権、日本の変革も訴える。自由と民主主義に国境も民族もない。すべてひとつながりだ。

香港のデモは半年以上続いている。逮捕者はすでに六〇〇〇人を超え、最長一〇年の刑期が課される暴動罪容疑での逮捕者も一〇〇〇人を超える。その多くが二〇代以下の若者。中には小学生もいる。「五〇年はそのままの制度で」という一国二制度を中国政府が約束した香港返還から二年。英植民地時代の「自由はあるが民主はない」という状況は好転するどころかますます後退している。若者らには二八年後のゴールが見えているのだろう。運動が始まってから二度ほど香港を訪れたが、そこで交流した青年たちは「いま闘わなければ未来はない」と言っている。

平和的なデモに参加する一〇〇万の市民と武

陳孤独 (#FIGHT FOR HONGKONG@2019)

装して警察と対峙する数千の勇武派の協力が今回の運動の特徴だと言われる。実際にはそれほど美しいものでもないことは、#THEECHO EONGKONG@2019のグループが二月に招聘した香港の新旧アクティビストの一致した考えだ。普通選挙の実施を訴えた二〇一四年雨傘運動での既成民主派に対する新興の本土派（香港ナショナルリスト）の批判は、非暴力主義の既成民主派を乗り越えようとして一揆的蜂起主義に走り、大弾圧を受けた。本土派の主張には中国人に対するヘイトも含まれている。対立する相手を差別や暴力で圧倒しようとするやり方は、運動の後退期に内部へ向かう。運動内部における民主主義の貫徹と差別的排除は決定的に重要である。「絶対に過ちを犯さない指導部」ではなく、指導部の過ちを民主的に修正することのできる仕組みこそが重要だ。そういう意味においては「指導者のない運動」といわれる香港の運動もさまざまな過ちや失敗、試行錯誤を繰り返しながらも前進しているように思う。ミレニアル世代の柔軟な思考とSNSなど新しいコミュニケーションツールを用いたスタイルが効果を発揮している。

その一方で、普通選挙の実現という二一世紀では当たり前の、しかしその歴史を振り返ると熾烈な闘

争によって実現された（あるいはされなかった）ことを考えると、香港の若者たちの運動は遥かな長征の端緒に就いたばかりだと言わざるを得ない。とりわけ対峙するのが、かの巨龍ともなれば尚の事。しかし巨龍も安泰ではない。グローバル資本主義のジャングルでの熾烈な生存競争だけでなく、みずからの内部に民族抑圧と資本の搾取に喘ぐ巨大なマグマを抱えてもいる。「自由を」「民主主義を」と叫ぶ香港青年の声は繰り返し巨龍の鋼の鱗に突撃する。魯迅が「呐喊」の序で述べた「鉄の部屋」のように。

警察と衝突する勇武派だけではない。授業のはじまる前や放課後に、学校や地域を巨大なヒューマンチェーンでつなぐ中高生らは今後の香港民主化運動の中核となるだろう。ぜひ中国国内にもチェーンをつなげてほしい。三罷ストの敗北を経て新しく登場しつつある青年らによる新労組結成の動きも注目だ。「香港に栄光あれ」という歌声のなかで確立した香港人アイデンティティは、自由と民主主義をその価値観のど真ん中に据えている。植民地主義の遺産と資本主義の負債との根本的な闘いは、実際にはすでに直面しているにもかかわらず、主体の形成という点からも、もう少し先の課題になるだろう。国際的な陰謀渦巻く香港情勢を正しくとらえるには民主主義的価値観こそ重要だ。民主主義は選挙／被選挙権だけにとどまらない。職場における労働者の権利確立をこえて、気候変動の主因である商品生産と賃労働の廃止、そして生産そのものを生産者自身のコントロール下に置く社会への展望こそ、二一世紀の自由と民主主義にふさわしい。

みたび

太田昌国の夢は夜ひらく 115

ゴーン騒動から何を読み取るか



ブルジョアジーが支配する社会にあっても、彼らなりの最上の規範と論理ならびに倫理によって律せられているあり方は、地域と時代によつてはあり得たし、今後もあり得よう。だが、二一世紀もすでに二〇年を経た現在を生きる私たちの観点からすると、それはどこに実在する「夢物語」なのかと思えてくる。

いま話題の日産自動車前会長、カルロス・ゴーンの「非法的」な出国事件を取り上げよう。日本の司法の在り方に関わつての（ただ一つこの件に関わつての）彼の問題提起には、司法に関わる人びとはもちろん社会の基盤を構成する私たち自身が再考し、正すべき論点が含まれている。だが、ここはそれを詳論する場ではない。冒頭に書いた問題意識に準えるなら、ブルジョアジーのためとあれば、彼ら自身がいかなる超規範的・超法規的な「管理秩序」でも設定するものなのだと思わされるのは、いわゆるプライベート・ジェット（以下、PJと略）の従来の利用方法にある。今回なされている報道には、にわかには信じがたい内容が多々あるが、もっとも驚くべきは、PJの離発着と通関に関するそれである。私たちが通常、国際便は

もとより国内便搭乗時に経験しているのは、煩わしいほどに入念になされる携行品検査である。一方、ゴーンが大型音響機材を入れる大箱に入つて出国したと伝えられる関西国際空港にあるPJ利用客の専用施設「プレミアムゲート玉響」は、海外富裕層の訪日増加を見込んで二〇一八年六月に設置されたばかりだ。関係者によれば、玉響の保安検査でエックス線装置に通すのは機内持ち込みサイズだけが対象で、大型荷物は対象外だという。他国の例を見ても、保安検査を義務付ける国際ルールは存在していない（以上事実の抽出は一月八日付け毎日新聞による）。つまり、PJを利用するような富裕層には、「テロリスト」も「麻薬の運び人」もいるはずはなく、一般的に考えても不快な税関検査を省略して（＝規制緩和を実施して）「へこころ楽しく」出入国できる便宜を例外的に図っていることを意味している。

ゴーンは今回の脱出作戦のために、没収された保釈金一五億円を超える一六億円を使ったのではと報道されている。なるほど、富裕層VIPのために設置されたPJ運用のための甘い規範は、「絵に描いたような」富裕者、カルロス・ゴ

ーンによつて「見事な」までに利用されたのである。日本の政界、司法界、メディア言論人の間に沸き起こっているゴーンに対する一斉非難の様子を見ている私には、それが、さながら、富裕層のみが享受できる特権的な権益を擁護しようとする者同士の間で起こっている「内ゲバ」に過ぎないと思えてくる。その双方をして「内ゲバ」の中で自滅させよ。

現首相は、日本を「企業がもっとも活動しやすい」国にするとの趣旨のことを幾度となく語ってきたが、まさに大企業のトップなどが使つてビジネスジェットについて、政府は手続きの簡素化など利便性の向上に取り掛かつてきた。国土交通省は日本の競争力強化や経済成長を目的として、民主党政権時代の二〇一〇年に検討会を設置し、受け入れ態勢の整備を行なつたうえで、発着制限の緩和、専用施設の整備（現在は、羽田、成田、中部、関西の四空港）、出入国手続きの簡素化および時間短縮などの優遇策を実施してきた。現首相の方針の下で、それは勢いを増し、国内空港での発着回数は、二〇一〇年の一万一〇〇〇回から二〇一八年は一万六〇〇〇回へと、およそ一・五倍に増加している。

今回のゴーン騒動を、拠るべき規範も倫理も喪失したブルジョアジーの「現在」を照らし出す出来事として総体的に把握すること。その先には、森友、加計、政権周辺の犯罪者の擁護、観桜会、自衛隊の中東派兵など、ブルジョア政治の腐朽性がすべて浮かび上がってくる。

（一月十一日記）

「即位・大嘗祭違憲訴訟」高裁（第二次提訴）なんと「差し戻し」判決を勝ち取る！

——〈壊憲天皇制・象徴天皇救国家〉批判 その7



二月七日「終わりにしよう天皇制！『代替わり』反対ネットワーク」の最後の街頭デモへ向けて、自分たちの活動の軌跡を確認するスライド（説明つき）、コント（大嘗祭をパロッドしたもの）、歌、踊りなどがつめこまれた「大集会」が持たれた。この長い闘いの中で、みな達者になっていた。

二月二十四日、「即位・大嘗祭違憲訴訟」の第二次提訴分の「差し止め訴訟」の判決。訴えを受け止める態度がほとんど見えなかった裁判長の「却下」しか予測しなかった私たちの前で「地裁ノ却下判決ヲ破棄スル」と宣告。傍聴席からはトンチンカンな「抗議」の声が飛んだ。弁護士とともに原告席にいた私も、何かの聞き間違いではないかとしばらく啞然。これは「ハッター！」と反応すべきだったと気づくのに時間がかかった。

一月二十六日、私は高裁で第一回の口頭弁論を原告の一人として読み上げていた。「控訴人」としての「意見陳述」したのは私一人だけ。そして一回だけで結審の結論（判決）がそれであった。形式的に言えば、私の弁論への判決がこれである（もちろん実質的に私の弁論以前に、裁判官はこうした判決を決めていたのだらうが）。なんであれ、ラッキーな体験であった。

私は、象徴天皇規定がトップにある憲法下での天皇制をめぐる「違憲訴訟」に積極的に取り組む意欲はあまりなかった。今回も、熱心に行っている仲間への義理のみが動機の原告参加であったに

すぎない。実は、前回の一九九〇年からの大阪での「即位の礼・大嘗祭違憲訴訟」にも参加している。それも運動上の義理だった。この時の高裁判決に、政府の唱える「天皇教」による「信教の自由の侵害」という判断が明示された。これも内容的には画期的なものであった。この記録は「天皇制に挑んだ一七〇〇人」（いけん訴訟団編著 緑風出版、一九九五年）として出版されており、私の、日本の貧乏人を代表して巨額の税金のムダ遣いを告発しているがごとき「弁論」もそこに収められている。このときも、消極的参加者としてはとてもラッキーだった。

今回は、象徴天皇規定のある憲法の土俵の上で、「人権」対「天皇制」という論理が、どこまでつめることができるかキチンと考えてみる。そういう課題を自分に設定して「意見」をまとめた。さて、「破棄判決」の論理をここで紹介しよう。

民事訴訟法第一四〇条には、こうある。「訴えが不適法でその不備を補正することができないときは、裁判所は、口頭弁論を経ないで、判決で、訴えを却下することができる」。

原審は、これを根拠に「口頭弁論を経ることなく訴えを却下」したが、その判断の前提は、これは「行政事件訴訟法第五条」の「民衆訴訟」すなわち、たんなる「選挙人たる資格」など「自己の法律上の利益にかかわらない資格」で訴訟が「提起」されているに過ぎないというものである。判

決はこうした判断が「不適法」ゆえに地裁に「差し戻す」との主張だ。より具体的にはこうだ。「……本件訴状には、『本件諸儀式が、原告らの信仰の自由を侵害するおそれがあることは明らかである』『原告らは、その思想と良心に対する強い圧迫感と侵害を感じるものである』などと記載され、結論として、『原告らは、被告に対し、納税者基本権および人格権に基づいて、政教分離原則違反、主権者としての地位（国民主権）、その他憲法上の人権その他規定違反である本諸儀式への国費の支出の差し止めを求める』と記載されているのであるから、控訴人らの差し止め請求が、納税者基本権のほか人格権に基づくものであるのは明らかである。このように人格権に基づくことが明記された請求が控訴人らの固有の法律上の利益に基づく請求ではあり得ないとするのは無理であり、そうすると原審は、控訴人らの人格権に基づく請求については何ら判断することなく、補正の余地がないとして控訴人らの訴えを却下したものと看做されるを得ない」。

民事訴訟第三〇六条「第一審の判決の手續が法律に違反したときは、控訴裁判所は、第一審判決を取り消さなければならぬ」に基づいて、原審を「取り消す」というわけだ（傍線引用者）。

私は、大阪のときと逆に、納税（金）の問題などには、人権一本で「意見」をまとめてよかった、などと一人で勝手に納得。

そんなことはともかく、天皇裁判など許さじという政治主義司法の内側から、手続き無視の「門前払い」はいくらなんでもの声が飛び出したという事実には、注目すべきである。

野次馬日誌

12月1日〜12月29日

【12月1日】

天皇、皇族◆愛子が、明仁、美智子に18歳の誕生日を報告するため、吹上仙洞御所を訪問。赤坂御所に戻り、徳仁、雅子と一緒に宮内庁長官や職員からの祝賀を受ける。

【立皇嗣の礼】◆政府が、4月1日の儀式「立皇嗣の礼」の形式や規模について、「平成」への代替わりの際に行われた「立太子の礼」を踏襲する方向で調整に入った。海外からは「賓客」を呼ばず、国内にいる大使らを招く方針。

日韓関係◆日韓両国の国会議員が2016年以降続けてきた議会交流「日韓議会会未来対話」に関し、19年の日本開催が見送られる見通しとなった。

【12月3日】

徳仁、雅子◆即位の礼や「大嘗祭」が終わったことを報告するため、昭和天皇陵と大正天皇陵を参拝。

赤坂離宮◆正月三が日は、徳仁即位に伴う慶祝行事の一環として、庭園（本館・別館は除く）が無料で公開されるほか、「祝賀御列の儀」で乗ったオープンカーも、1月5日まで展示。

【12月4日】

天皇、皇族◆徳仁、雅子が皇居・宮中三殿の「賢所」で、即位の礼や「大嘗祭」が終わったことに感謝し、神楽を奉納する「賢所御神楽の儀」に臨む。三種の神器

のうち、剣と璽（勾玉）を携えた侍従が随行。5月以来続いた一連の即位関連儀式を終えたと報道。秋篠宮、紀子ら皇族や、安倍晋三首相ら三権の長や閣僚が賢所前で頭を下げる。

信子◆故寛仁の妻信子が、第22回全国農業担い手サミットの開会式に出席するため、静岡市入り。

【12月6日】

明仁、美智子◆アフガニスタンで殺害された医師中村哲の遺族に対し、宮内庁を通じて弔意を伝えた。

信子◆故寛仁の妻信子が、静岡市の複合施設で開かれた第22回全国農業担い手サミットの開会式に出席。

【12月7日】

徳仁◆東京都新宿区のホテルで開かれた日本山岳会の夕食会に出席。「私的」な活動として参加。

【12月8日】

佳子、悠仁◆渋谷の国立オリンピック記念青少年総合センターで開かれた「第41回少年の主張全国大会」に臨席。

皇居◆大嘗宮の一般参観が終了。11月21日からの18日間で約78万2千人が訪れた。秋恒例の乾通りの一般公開も終わり、約38万1千人が訪れた。

【12月9日】

天皇、皇族◆雅子が56歳の誕生日を迎え、宮内庁を通じて文書による感想を発表し

た。徳仁と共に皇居・宮殿で、宮内庁の山本信一郎長官ら幹部職員や、安倍晋三首相と閣僚らからそれぞれ祝賀を受ける行事に出席。正午ごろから、秋篠宮、紀子や眞子、佳子ら皇族、親族らが集まる祝宴の場が設けられる。吹上仙洞御所で明仁、美智子にあいさつ。赤坂御所で侍従職の祝賀に応じた後、愛子と悠仁の「祝い」を受ける。夜、赤坂御所に明仁、美智子や秋篠宮一家、黒田清子夫妻が集まり、天皇一家と共に夕食。

大嘗宮◆大嘗宮の建材の大部分を、バイオマス発電の燃料として活用する方針。建築資材としての再利用は困難と判断。資源の有効利用のため発電に充てることにし、建材以外の砂利や柴垣などは、皇居や赤坂御用地などで活用する。

皇位継承策◆麻生太郎・副総理兼財務相が10日発売の月刊誌「文芸春秋」のインタビューで、安定的な皇位継承策として旧宮家（旧皇族）の皇籍復帰を提案。

【12月10日】

眞子、佳子◆台風19号の被災者支援のチャリティー上映会に出席し、ティーズ二映画「アナと雪の女王2」を鑑賞。

掌典職◆皇室の祭祀をつかさどる掌典職のトップ、楠本祐一・掌典長が退任する人事が発令される。後任は空席で、掌典次長が代行する。

【12月11日】

瑛子◆故寛仁の次女瑛子が、ミャンマーへの「私的旅行」のため、成田発の民間機で出発。

【12月12日】

【立皇嗣の礼】◆政府が皇位継承に関する式典委員会を開き、4月16日の儀式「立皇嗣の礼」の次第や関連行事の詳細について検討。

【今年の漢字】◆「令和」の「令」に決まり、日本漢字能力検定協会が、京都市東山区の清水寺で発表。

【12月13日】

美智子◆9月中旬以降、血液が混じった嘔吐を複数回したり、体重が減少したりするなど体調不良が続いている。

【12月14日】

秋篠宮、紀子◆第43回全国育樹祭の式典出席などのため、民間機で沖縄入り。糸満市の国立沖縄戦没者墓苑を訪れ、納骨堂に献花。同市の沖縄県平和創造の森公園を訪問。1993年の全国植樹祭で明仁、美智子が苗木を植えたリュウキュウマツの枝打ちをする。

【12月15日】

秋篠宮、紀子◆那覇市の沖縄県立芸術大の敷地内から、10月の火災で正殿などが全焼した首里城を視察。これに先立ち、宜野湾市で開催された第43回全国育樹祭式典に出席し、秋篠宮があいさつ。

【12月16日】

【十大ニュース】◆「社会部長が選ぶ今年の十大ニュース」（新聞之新聞社主催）の選考会が、通信8社の社会部長らが出席して東京都内で開かれ、1位に「天皇陛下が即位。『令和』に改元」を選ぶ。

【12月17日】

秋篠宮◆日本動物園水族館協会の総裁として動物園技術者研究会に出席するため、

大阪市入り。

眞子、佳子◆千葉県市川市の宮内庁新浜鴨場で、駐日外国大使夫妻らに伝統の力毛猫を紹介する恒例行事に接待役として参加。

宮内庁長官◆宮内庁長官の認証式が皇居・宮殿で開かれ、西村泰彦次長が長官に就任。2016年9月から長官を務め、天皇代替わりに関する儀式を取り仕切った山本信一郎が退任。

徳仁、雅子、愛子◆東京都港区のニッショーホールを訪れ、アニメ映画「この世界の（さら）にくつもの」片隅に「のチャリティー」試写会に出席し、作品を鑑賞。

秋篠宮◆大阪市天王寺区の天王寺動物園を訪れ、爬虫類の展示などを視察。

12月19日
徳仁、雅子◆10月の台風19号などで大きな被害を受けた12都県に、見舞金を贈る。

12月20日
天皇、皇族◆徳仁、雅子が、訪日しているウスベキスタンのミルジヨエフ大統領夫妻を皇居・宮殿に招き、会見。会見後、宮殿で昼食会が開かれ、秋篠宮、紀子ら皇族が出席。

皇室関連予算案◆2020年度予算案の歳出で、皇室関連は代替わり関連費用として19億円を計上した。代替わり関連のうち、住まいの改修で東京・赤坂の「仙洞御所」（現赤坂御所）へのエレベーター設置工事などに7億円、秋篠宮邸の改修費に8億円、立皇嗣の礼は4千万円、「大嘗宮」の取り壊し後の敷地の原状回復に2億円を計上。

12月21日
代替わり◆「高御座」の一般公開が22日から東京・上野の東京国立博物館で始まるのを前に報道陣に公開される。隣に「御帳台」が並び、別の展示室で、「即位礼正殿の儀」で使用した太刀や弓などの道具、装束を着た人形を同時に展示。

12月22日
天皇、皇族◆明仁が86歳の誕生日を迎え、徳仁、雅子や秋篠宮、紀子ら皇族が皇居を訪れ、明仁、美智子に祝意を伝える。

12月24日
園遊会◆菅義偉・官房長官が記者会見で、首相主催の「桜を見る会」の招待者名簿を開示できないとする理由について「公表する前提で招待していない」。招待者名簿を公開している天皇、皇后「主催」の

園遊会に関して「個人情報報道機関に提供すると案内状に記載し、あらかじめ同意を得ている」と述べ、前提が異なるとの見解を示す。

12月25日

歌会始◆1月16日に皇居・宮殿で開かれる「令和」最初の「歌会始の儀」で、歌が詠み上げられる一般の入選者10人を発表。

皇居◆新年に皇居・宮殿や天皇一家の住まいの赤坂御所などを飾る伝統の盆栽「春飾り」の準備が大詰めを迎えたとして、宮内庁が、作業風景を報道陣に公開。

12月26日

徳仁、雅子◆10月の台風19号などで大きな被害を受けた宮城県丸森町と福島県本宮市を日帰りで訪れ、被災者を見舞う。阿武隈川支流が氾濫した五福谷地区を訪れ、家が土砂にのみ込まれた状況を視察。仮設住宅に移動し、被災者らと約30分間懇談。ヘリに乗り、本宮市に移動。避難所だった市の保健福祉施設「えぽか」で被災者らと懇談。

皇位継承策◆自民党の石破茂・元幹事長が、TBSのCS番組収録で、安定的な皇位継承策に関し、女系天皇の容認を排除する。

除せずに検討する必要性を訴え「女系だからすなわち駄目だ、という議論にはあまり賛同していない」。

12月27日

「皇統譜」◆宮内庁が、天皇と皇族の戸籍に当たる「皇統譜」に、一連の即位関連儀式を終えた徳仁を、第126代天皇として登録。明仁の退位などを記載。宮内庁書陵部で、西村泰彦長官らが正本と副本に毛筆で署名し、手続きを終える。

新年一般参賀◆宮内庁が、翌年1月2日に行われる「令和」初の新年一般参賀に明仁、美智子が参加すると発表。

「内奏」◆安倍晋三首相が、皇居で「内奏」。

12月28日

元号◆政府が4月1日の新元号発表9日前の時点で、候補名案を委嘱していた中西進・元大阪女子大学長（日本古典）に、現存する日本最古の歌集「万葉集」限定で元号案作成を依頼していた。

12月29日

天皇、皇族◆25歳の誕生日を迎えた佳子、徳仁、雅子にあいさつするため、赤坂御所（東京・元赤坂）を訪問。明仁、美智子の住まいの皇居・吹上仙洞御所を訪れる。悠仁が同行。



おわてんねっと集会「終わりにしよう天皇制2019」

.....

二〇一九年の「代替わり」反対を闘い

抜いた「終わりにしよう天皇制!」「代替わり」反対ネットワーク（おわてんねっと）は、一二月七日、千駄ヶ谷区民会館で「終わりにしよう天皇制2019」12・7大集会&デモをもった。おわてんねっととしては（たぶん）最後の街頭デモを

伴う集会である。

集会のオープニングは、すでにおなじみ「おっちゃんズ」の歌「元号やめよう」。続いて、これも毎回好評のコント。舞台は怪しげなスナック「大嘗亭」。闘争の連続で多忙な中でもよく練られたシナリオと、「玄人はだし」の演技と声優ぶりが、

何度も爆笑を誘った。引き続き、「1・9国民祭典」のスライド上映が行われた。構成と解説は桜井大子。各省庁が横並びで後援している奉祝式典なのに、「民間」主催という形式で、グロテスクな神道主義（日本神話の絵解き）が前面化していること、他方「嵐」や芸能人が登場して

祝祭ムードを盛り上げていることが分析された。

休憩を挟んで、リュウセイオー龍の舞踏。肉体をエネルギーに躍動させてのパフォーマンスに魅せられた。続いて「フライド&トーク」代替わり反対行動をふり返る。前史も含めたおわたんねつとの活動も、司会の京極紀子と、井上森ほかおわたんねつとのメンバーが解説。ずいぶんいろいろな行動を重ねてきたものだ。最後に再び「おっちゃんズ」の歌「天皇に平和語る資格なし」「天皇制はいらないよ」で、集会は終了。

この集会で示されていたような多様な表現と行動、これこそが一年間の反「代替わり」闘争を支えたエネルギーであったことは明らかだ。

その後渋谷デモに移り、原宿駅前から渋谷に向けてのデモ。右翼の姿はごくわずか。注目度は高く、宣伝カーからの呼びかけも好評だった。集会とデモの参加者は約一〇〇名。(北野 宣)

現在の「日韓関係」を天皇制帝国の植民地支配責任をふまえて考える

二〇一九年二月一日、「平成」の代替わりを問う連続講座第Ⅱ期第五回「現在の「日韓関係」を天皇制帝国の植民地支配責任をふまえて考える」が三名の報告者をむかえビブリス・プラン研究所で開かれた。

内海愛子さん（歴史社会学）は「東京

裁判」はもっぱら戦勝国俘虜に対する犯罪を裁き、中国人強制連行が二件のみ、朝鮮人強制連行に至っては何の審判もなかった」と述べ、朝鮮人戦犯一三〇名の内七八%が俘虜関係の罪で処罰された事実を示した。一九四二年に朝鮮で捕虜監視員を募集、三〇〇人以上が日本占領下の東南アジア諸国に送られた結果である。日本の戦後はそのスタート時点から植民地支配責任について距離を置いてきた、といえるのだ。

辻子実さん（靖国参拝違憲訴訟の会）は映像を使って朝鮮・台湾に今も一部が残る「侵略神社」について説明した。現在のソウル市にあった巨大な朝鮮神宮は八月一日（光復節）の翌日、白々しくも「神が天に戻った」と称されて廃社となっている。神社参拝奨励などの皇民化政策と植民地支配は同一のものであったということに他ならないが、そのことが靖国神社合祀などの問題に連なっていることを忘れてはならないだろう。

天野恵一さん（反天皇制運動連絡会）は天皇大権のひとつ「植民地に対する大権」による朝鮮支配責任について述べ、戦後の憲法学にはそれによる支配システムの政治的意味を歴史的に問い直す作業が欠落していると指摘した。

「嫌韓」で体面を保とうとする現在の日本政治、それは突然現出してきたわけではない。過去から見つめなおす事の大切さを考えさせられた会だった。

（岡本和之／市民の意見30の会・東京

「即位・大嘗祭」違憲訴訟、側に一矢を報いる！

二〇一八年二月に提訴した「即位・大嘗祭」違憲訴訟。「代替わり」儀式が進行してしまうなかで裁判も進んできたが、昨年二月二十四日、東京高等裁判所において、予想外のことにより「原判決破棄」の判決が出た。被告（被控訴人）の国に対して一矢報いたのである。

その前に、この裁判の構造を整理しておく必要があるだろう。

この訴訟は、現在二つの裁判で成り立っている。一つは「国賠請求裁判」で、これは二〇一八年末提訴の第一次訴訟と二〇一九年三月の第二次提訴分が併合されて、合計三十八人の原告によって、現在までに四回の口頭弁論が東京地裁でおこなわれている。

もう一つの裁判が、「代替わり」諸儀式的差し止めを求める裁判である。言うまでもないことだが、原告団で提訴した内容は国賠と差し止め一体であり、本来同一の法廷で審理されなければならないものだった。しかし地裁は、不当にもこの訴訟を、恣意的に「差し止め請求分」と「損害賠償請求分」とに分離し、異なる部に係属させて、別々に審理することにしてしまった。こうして裁判は二つ（第一次訴訟と第二次訴訟の別を入れれば四つ）に分れることになった。

差し止め請求のうちの第一次訴訟分は、一回も口頭弁論が開かれないまま、昨年二月五日に東京地裁で却下、四月一七日

に東京高裁で棄却決定と続き、最高裁も一〇月一日に上告棄却の決定を下してしまった。

同じく分離された差し止め請求の第二次訴訟分についてだが、東京地裁は第一次同様、六月二十八日に却下の判決を下した。原告団・弁護団は当然これに対して、控訴を申し立てた。すると、意外なことに東京高裁は口頭弁論を開くと言ってきた。一月二十六日の法廷は、控訴人（天野恵一さん）が意見陳述をしたものの、裁判長はきちんと聞いているようでもない。弁護団は、審理をきちんと継続しろと強く要求したが「却下」と言い放ち、たった一〇分で法廷は終わってしまった。

そして一方的に指定された二月二十四日判決当日。前回の裁判長の態度から、不当判決必至と構えていた私たちの耳に聞こえたのは「原判決破棄・一審差し戻し」。?! もしかしたらこちらの勝ち？判決内容は、地裁判決は原告側が主張した納税者基本権にもとづく差し止めを却下したが、人格権にもとづく請求については判断していなかったため、手続き上法令違反にあたる、という判断。形式的な理由とはいえ、結果的に、原判決の破棄と一審差し戻しを要求していた原告側の訴えが認められることになったわけ、予想外の結果に狼狽していたに違いない国側代理人の顔を見て、思わず嬉しい気持ちがいっぱいのも正直なところ。

今後、被控訴人（被告）である国は、高裁判決を不服として最高裁に上告することになるのか。上告しなければあらた

めて一審で裁判をやりなおすことになるし、上告したらしたで、もし被上告人(原告)の逆転敗訴を導こうとすれば、最高裁で弁論を開く必要が生じるという、これもまた希有な展開になっていくはずである。ぜひ、注目していただきたい。

なお、国賠請求分の五回目の口頭弁論は二月五日(水)一四時三〇分から東京地裁の103号法廷。ぜひ傍聴して下さい。

(訴訟の会事務局/新孝)

八木天日談

12月7日(土) ● 終わりにしよう天皇制

2019 (集会報告参照)

12月8日(日) ● 「表現の自由」展・その後」中止事件の「本質」とは何か

12月10日(火) ● 胡大平靖国抗議裁判第2回公判

12月14日(土) ● 多田諤子反権力人権賞受賞式

● 「平成」代替わりを問う連続講座 現在の「日韓関係」を天皇制帝国の植民地支配責任をふまえて考える (集会報告参照)

12月16日(月) ● 警視庁機動隊の沖縄への派遣は違法住民訴訟・判決言い渡し

● 集会・日本の中国侵略と靖国神社

12月18日(水) ● アキヒト退位・ナルヒト即位問題を考える練馬の会解散集会

12月20日(金) ● 協力と緊張／香港デモにおける非暴力派と直接行動派

12月21日(金) ● 新国立競技場オープニングセレモニー抗議情宣

● 衛香港之戦2019

12月23日(月) ● 胡大平靖国抗議裁判判決

12月24日(火) ● 即位大嘗祭違憲訴訟第二次訴訟差し止め請求分控訴審判決言い渡し (集会報告参照)

● オリンピックおことわりリンク丸の内スタンディング

1月12日(日) ● オリンピックの終わりの始まり

1月13日(月) ● 日雇全協総決起集会

集会情報 INFORMATION

開催中 ● 朝鮮人「慰安婦」の声をきく

13時〜18時(月・火・休日休館) / WAM 女たちの戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅) / 主催: 同館

1月18日(土) ● 大軍拡を斬る! 2020年度防衛予算分析会

13時15分〜 / ピーブルズ・プラン研究所(地下鉄江戸川橋駅ほか) / 吉沢弘志、池田五律、杉原浩司ほか / 主催: 大軍拡と基地強化にNO!アクション2019

1月20日(月) ● ノー! ハブサ(合祀)

訴訟第二次控訴審第1回口頭弁論 15時〜 / 東京地裁103号法廷(地下鉄霞ヶ関駅)

● 韓国人靖国無断合祀・軍人軍属強制動員問題の解決を!

18時30分〜 / 港勤労福祉会館第一洋室(JR田町駅ほか) / 主催: ノー! ハブサ(090-9204-7607 山本)

1月23日(木)〜26日(日) ● 写真展となりの宋さん

23日・24日 11時〜20時 25日 11時〜20時 26日 11時〜17時 / たましんRISURUホール(JR立川駅) / 関連イベントあり / 主催: 同実行委員会(080-4624-3935 谷口)

1月24日(金) ● 月例アンチ・オリンピックスタンディング

19時〜 / 東京駅丸の内中央口前御行幸通り / 呼びかけ: オリンピック災害おことわり連絡会 (info@2020okotowa.jp)

1月25日(土) ● LA報告会 コロシム都市1932-1964/2028

18時開場 / 文京シビックセンター5C(地下鉄後楽園駅ほか) / 井谷聡子、いちむらみさこ / 主催: オリンピック災害おことわり連絡会

2月5日(水) ● 即位大嘗祭違憲訴訟(国賠請求分) 第5回口頭弁論

14時30分〜 / 東京地裁103号法廷(地下鉄霞ヶ関駅)

2月7日(金) ● 原発被ばく労災あらか

ぶさん裁判第15回口頭弁論 14時〜 / 東京地裁103号法廷(地下鉄霞ヶ関駅)

● 東京オリンピック パラリンピック2020を問う練馬の会(仮) 結成集会

18時40分開場 / 練馬区厚生文化会館(西武池袋線ほか練馬駅) / 宮崎俊郎 / 連絡先: 090-5208-5803 (池田)

2月11日(火) ● 「代替わり」に露出した「天皇神話」を撃つ! 2・11反「紀元節」行動

13時15分開場 / 文京シビックセンター4Fホール(地下鉄後楽園駅) / 小倉利丸 / 主催: 同実行委員会(03-6438-0263)

2月23日(日) ● おわてんねと解散集会 天皇のいない民主主義を語ろう

13時15分開場 / ニュー新ホール(JRほか新橋駅) / 主催: 終わりにしよう天皇制! 「代替わり」反対ネットワーク(03-3438-0263)

2月29日(土) ● 地域からつくる反ヘイト運動

13時30分開場 / 豊島区民センター7F(JR池袋駅ほか) / 川崎・相模原・墨田・練馬のグループ / 主催: 差別・排外主義に反対する連絡会

● 「平成」代替わりを問う連続講座 象徴天皇制と(転向)

16時30分開場 / ピーブルズ・プラン研究所 地下鉄江戸川橋駅ほか / 伊藤晃、天野恵一 / 主催: 同研究所(03-6424-5748)

多田三

● 反天連が褒められた? ホントか? ホントです。誰か教えたって(木寛)

● 36年ぶる。本当に長いことお疲れさま。褒めよう(鯉)

● いただいてあらためて重たいです、多田諤子反権力人権平和賞(編組)

● 賞としていただいた多田さんの「私の敵が見えてきた。いい本でした(貌)」
● 今回は貂さんは作業お休みでした。ほかのあにまるも、いたりいなかったり。